

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成15年度の水稲作付面積（青刈り面積控除後）は19万6,800haで、前年に比べて2,800ha（1%）減少した。これは主に、水田における野菜の作付けが増加したためである。品種別の作付状況を見ると、ヒノヒカリの割合が依然として高く、九州のうち品種作付面積の56%を占めている。次いで、コシヒカリが14%で、両品種で70%を占めている（いずれも前年と同じ）。

沖縄県における水稲作付面積は1,050haで、前年より20ha（2%）増加した。ひとめぼれの作付けが全体の91%（前年87%）を占めている。

2. 作柄の概況

九州における平成15年産水稲の収穫量は94万5,600tで、前年に比べて6万2,400t（6%）減少した。これは、作付けの減少に加えて10a当たり収量が減少（前年差25kg）したためである。

九州地域の作柄は、作況指数96の「やや不良」で、10a当たり収量は480kgであった。県別の作況指数は、佐賀県が95、長崎県、熊本県、宮崎県が96、福岡県、大分県が97、鹿児島県が98であった。このうち早期栽培については、主産県の宮崎県、鹿児島県ともに作況指数93の「不良」であった。また、沖縄県の作況指数は105の「やや良」であった。

3. 生育の概況

1) 普通期水稲

九州地域では6月の移植後、7月中下旬の低温寡照により初期生育が抑えられ、穂数は前年よりやや減少した。幼穂形成期間に当たる8月は天候が回復し、特に福岡県、佐賀県の中晩生品種では一穂初数が多くなり、単位面積当たり初数は前年並みないしやや増加した。しかし、そ

他の地域・品種では、初数が前年よりやや減少した。出穂期は前年並みないしやや遅い程度であった。

登熟期間に当たる8月下旬あるいは9月上旬以降は多照であったが、高温・小雨および9月中下旬に接近した台風14号と15号の強風により北部九州を中心に登熟不良となった。熊本県・大分県の登熟は前年並み、宮崎県・鹿児島県ではやや良となった。

玄米品質については、9月上中旬の記録的な高温（前年差2～3℃）によりヒノヒカリを中心に充実不足や乳心白粒が多発し、九州全域の1等米比率は53%（全国74%）と、昨年59%をさらに下回った。

2) 早期水稲

田植期から最高分げつ期に当たる4～5月が高温多照で経過したため、初期生育は良好であったが、その後、低温寡照となり穂数は前年並み、一穂初数は前年より少なくなり単位面積当たり初数は前年より少なかった。出穂期は前年より2～4日早かった。6月中旬に接近した台風6号により出穂の早い地域・品種で籾の変色、不稔の発生がみられたほか、6月下旬から7月の低温寡照により登熟は前年よりやや不良ないし不良となった。

なお、沖縄県の1期作では田植期から幼穂形成期にあたる2月下旬から5月上旬にかけて高温多照で生育は良好であった。その後、寡照傾向となったが、出穂期、成熟期は前年並みで、登熟も良好であった。2期作では、田植期から収穫期にあたる8月上旬以降11月上旬まで高温傾向で生育は良好であった。

4. 被害の概況

九州地域の被害総量は13万9,800tで被害率は14.3%と前年を3.8ポイント上回った。被害種類別にみると、気象被害が9.2%で前年を4.3ポイント上回り、これは主に7月から8月にかけての日照不足によるとみられる。また、病害の被害率は3.1%で前年を0.8ポイント下回ったが、これは主にいもち病が前年を0.3ポイント下回って発生したためである。虫害の被害率は1.7%で前年を

2003年産水稲の作付面積と収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収量	収 穫 量	作 況 指 数	前年との比較					
					作付面積		10a当たり収量		収 穫 量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
	(ha)	(kg)	(t)		(ha)	(%)	(kg)	(%)	(t)	(%)
全国	1,660,000	469	7,779,000	95	△23,000	99	△ 58	89	△1,097,000	88
九州計	196,800	480	945,600	96	△ 2,800	99	△ 25	95	△ 62,400	94
福岡	40,400	483	195,100	97	△ 200	100	△ 28	95	△ 12,400	94
佐賀	28,400	500	142,000	95	△ 200	99	△ 33	94	△ 10,400	93
長崎	14,200	448	63,600	96	△ 200	99	△ 25	95	△ 4,500	93
熊本	40,800	491	200,300	96	△ 1,100	97	△ 32	94	△ 18,800	91
大分	26,100	485	126,600	97	△ 300	99	△ 28	95	△ 8,800	94
宮崎	20,900	464	97,000	96	△ 500	98	△ 17	96	△ 5,900	94
鹿児島	25,900	467	121,000	98	△ 400	98	0	100	△ 1,800	99
沖縄	1,050	327	3,430	105	△ 20	98	12	104	60	102

注) a) 資料：「平成15年産水陸稲の収穫量 平成15年12月8日公表」農林水産省大臣官房統計部。

b) △は減少量を示す。

0.1ポイント上回った。

沖縄県では被害量が239tで被害率は7.3%と平年を1.3ポイント下回った。主に台風による風水害であった。（九州沖縄農業研究センター水田作研究部 森田 敏）

〔麦 類〕

1. 作付の概況

九州地域における2003年産の麦類の作付面積は54959haで、前年に比べて3%増加した。麦種別では、小麦が33315ha、二条大麦が19960ha、裸麦が1684haで、前年に比べて小麦は1856ha（6%）増加したが、二条大麦は228ha（1%）、裸麦は180ha（10%）減少した。全国の作付面積に占める九州地域の割合は小麦が15.7%（対前年比0.9%増）、二条大麦が50.5%（同0.9%増）、裸麦が28.5%（同1.6%減）となった。

県別では、小麦は鹿児島県を除くすべての県で3～28%増加した。二条大麦は福岡県と大分県を除くすべての県で減少した。裸麦は佐賀県と宮崎県を除くすべての県で減少した。

2. 生育概況

一部地域では降雨により播種作業が遅れたところもあったが、概ね播種、出芽は順調であった。しかし、1月から3月の降雨等により穂数が少なく、4月中旬から5月中旬の降雨・日照不足（台風2号）等による湿害の発生により登熟が不良となり、3麦とも10a当たり収量が前年を下回った。また、登熟期の降雨により福岡県、佐賀県、長崎県では赤かび病の発生がみられた。

2003年産麦類の作付面積と収穫量

麦種	作付面積 (ha)	10a 当たり 収量 (kg)	10a 当たり 収量 (t)	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10a 当たり 収量		対差	
					対比 (%)	対差 (ha)	対比 (%)	対差 (t)	対比 (%)	対差 (t)
小麦	全国	212,200	403	855,200	109	103	5,300	101	103	27,400
	福岡	15,100	309	46,700	87	103	400	101	104	1,600
	佐賀	8,910	300	26,700	87	109	740	93	101	200
	長崎	1,010	252	2,550	83	119	158	84	100	△ 10
	熊本	4,800	305	14,600	100	109	390	92	100	0
	大分	3,420	257	8,790	79	105	160	103	108	640
	宮崎	51	263	134	...	128	11	94	120	22
	鹿児島	24	208	50	...	89	△ 3	89	79	△ 13
二条大麦	全国	39,500	312	123,300	84	97	△1,200	93	91	△12,800
	福岡	4,210	256	10,800	77	101	60	104	106	600
	佐賀	12,100	245	29,600	69	98	△ 200	87	86	△ 5,000
	長崎	583	275	1,600	80	95	△ 31	84	79	△ 420
	熊本	2,010	265	5,330	82	98	△ 50	100	97	△ 150
	大分	819	282	2,310	82	112	87	98	109	190
	宮崎	34	282	96	...	49	△ 35	109	54	△ 83
	鹿児島	204	188	384	...	78	△ 59	68	53	△ 339
裸麦	全国	5,900	312	18,400	88	95	△ 290	96	92	△ 1,700
	福岡	328	250	820	...	97	△ 10	98	95	△ 45
	佐賀	127	217	276	...	102	3	79	81	△ 64
	長崎	365	177	646	...	83	△ 76	84	69	△ 285
	熊本	26	92	24	...	41	△ 37	41	17	△ 119
	大分	832	234	1,950	71	93	△ 60	93	87	△ 300
	宮崎	6	233	14	...	150	2	104	156	5
	鹿児島	0	187	0	...	0	△ 2	125	0	△ 3

注) a) △は減少を示す。

b) 資料は、平成15年10月30日農林水産省公表による。

以上の結果、九州全体の作況指数は小麦で88、二条大麦で73、裸麦で69といずれも不良であった。

3. 作柄の概況

作柄は全ての麦種で不良であった。小麦の作況指数は熊本県が100の平年並みで合った以外は、79～87の不良であった。二条大麦は全ての県で69～84の不良であり、長崎県を除き2年連続で不良であったことになる。裸麦の作況指数は主産県である大分県が71と不良であり、他県の10a当たり収量も92～250kgと著しく低かった。

（九州沖縄農業研究センター水田作研究部 小田俊介）

〔カンショ〕

1. 作付の概況

2003年度の全国の作付面積は39,700ha（前年より2%減）で、九州は16,528ha（同3%減）であった。生食用を中心とした価格の低迷や農家の労働力事情等により全国的に作付面積が減少しており、九州でも長崎県、熊本県や大分県の作付面積は前年に比べて6～8%減少した。一方、鹿児島県や宮崎県では焼酎需要の高まりから焼酎原料用の作付が増加したため、前年と同じ作付面積となった。

2. 作柄の概況

長雨や日照不足の影響により九州全県で単収は前年に比べて低くなった。

鹿児島県では苗の生育は良好であり、苗の活着も4月中旬以降、高温で適雨もあったことから、総じて前年並みとなった。茎葉の生育については、5月上旬から日照不足となったため、やや過繁茂となったが、8月以降はおおむね好天に恵まれ、前年並みとなった。着いも数については、4月中旬までの植付けではおおむね前年並みで、4月中旬以降の植付けでは、日照不足等によりやや少なく、総じて前年に比べてやや少なくなった。いもの肥大については、5月上旬からの日照不足により肥大が悪く、8月以降はおおむね好天に恵まれたものの、総じて前年に比べてやや劣った。病害虫については、ナカジロシタバ、ハスモンヨトウによる葉の食害は軽微であった。以上のことから、10a当たり収量は2,890kgで前年を430kg（13%）下回り、作況指数は98であった。収穫量は34万1,000tで、前年に比べて5万800t（13%）減少した。

宮崎県では、苗の生育はおおむね天候に恵まれたことから前年産並みのやや良好であった。5月中旬からの長雨および日照不足等により、茎葉の生育はやや不良で、着いも数はやや少なくなり、特に早掘栽培でいもの肥大が不良となった。普通掘りについては、8月下旬以降おおむね天候に恵まれ、病虫害の発生も軽微であった。以上のことから、10a当たり収量は2,480kgで前年産を200kg（7%）下回り、作況指数は97であった。収穫量は5万2,100tで、前年産に比べて4,200t（7%）減少した。

（九州沖縄農業研究センター畑作研究部 吉永 優）

2003年度カンショ作付面積と収穫量

区分	作付面積 (ha)	10a 当たり 収量 (kg)	作況 指数	前年産との比較					
				作付面積		収穫量			
				対差 (ha)	対比 (%)	対差 (t)	対比 (%)		
全国	39,700	2,370	941,100	97	△800	98	93	△88,900	91
九州	16,528	2,024	443,130	92	△160	97	88	△67,290	85
福岡	250	1,390	3,480	91	△5	98	88	△550	86
佐賀	123	1,770	2,180	92	△2	98	87	△370	85
長崎	661	1,850	12,200	88	△54	92	86	△3,200	79
熊本	1,290	2,090	27,000	86	△80	94	84	△7,300	79
大分	304	1,700	5,170	91	△19	94	91	△870	86
宮崎	2,100	2,480	52,100	97	0	100	93	△4,200	93
鹿児島	11,800	2,890	341,000	98	0	100	87	△50,800	87
沖縄	290	—	—	—	△5	98	—	—	—

注) 平成15年産かんしょの収穫量(農林水産省統計部 平成15年12月18日公表)に基づいて作成。ただし、沖縄県は平成14年農作物作付(栽培)延べ面積および耕地利用率(沖縄総合事務局農林水産部 平成15年7月15日公表)による。

2002年産大豆作付面積と収穫量

区分	作付10a 面収量 (ha/kg)	作況 指数	前年産との比較 対差対比 (ha)(%)	前年産との比較 対差対比 (kg)(%)									
					全国	51,900	2,231	688	2,000	01	△28	84	△38,688
					九州	25,900	38,900	△400	98	△96	61	△25,800	
福岡	8,570	12,100	60	01	△107	57	△9,000						
佐賀	8,770	14,100	10	00	△135	54	△11,800						
長崎	810	8	96	00	△23	97	△62	66	△5				
熊本	3,520	74	6,125	10	00	△68	72	△2,380					
大分	3,200	19	3,800	△340	90	△46	72	△2,030					
宮崎	570	74	990	△98	103	103	102						
鹿児島	470	1	700	△50	90	△7	96	△1					
沖縄	—	—	—	—	—	—	—	—					

注) 資料は農林水産省統計情報部(平成15年2月5日公表)による。
△は減少を示す。

〔大豆〕

1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で151,900haに達し、前年より2,000ha増加した(前年比101%)。これに対し、九州では25,900haで前年比98%と、全国と異なり前年より400ha減少した。県別では、福岡県、佐賀県、熊本県でわずかに増加したが、大分県で340ha(前年比90%)、鹿児島県で50ha(前年比90%)と減少率が大きかった。長崎県、宮崎県でもわずかに減少した。

2. 作況の概況

本年は、播種時期にあたる6月中旬から7月下旬まで降雨日が多く、播種できない圃場や播き直し圃場もあるなど播種作業に大きな支障が認められた。北部九州を中心に播種の最盛期が7月下旬から8月上旬となった地域が多く、例年より20日程度遅い播種となり、適期播種できた場合でも播種後の降雨や高温で出芽不良が多く認められ、生育が抑制された。宮崎県については7月上・中旬の降水量は平年並みで、播種ピークは7月中旬で出芽もほぼ良好な地域が多かった。8月の開花期以降は天候が回復し、全般的に開花・着莢が良好で順調な生育を示した地域が多かった。9月から10月は日照時間が平年並みかやや多く、降水量がやや少なく経過した地域が多く、生育は概ね良好であった。福岡県では11月の気温が高かったためか登熟がやや遅れ、収穫ピークが12月上旬で全般的に小粒で検査等級も昨年より劣った。概して、収穫時期は播種時期の遅れもあり例年より遅く推移し、登熟期の乾燥や登熟の遅れによる粒の充実不良、あるいは、粒揃い不良で検査等級の低下した地域が多かった。台風被害は本年度は軽微であった。病虫害については、ハスモンヨトウが熊本県、大分県、鹿児島県の一部地域で多発し、大分県では被害程度が平年より多かったが、福岡県、佐賀県では平年並みかやや少なかった。カメムシ類については福岡県、鹿児島県ではやや少なかったが、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県では平年並みかやや多かった。紫斑病については全般的に少ないようであった。また、発芽不良や天候不順による中耕培土の遅れで雑草の多発した圃場も認められた。

全国の作況指数は84と平年よりかなり少なかった。九州では、宮崎県の104を除き、各県とも平年より不良で、

特に福岡県、佐賀県、長崎県、大分県は著しく少なく、九州全体としても74で全国平均より低かった。福岡県と佐賀県では播種の遅れなどで10a当たり収量も大きく低下し、前年の収穫量よりそれぞれ9,000t、11,800t少ない収穫量であった。

(九州沖縄農業研究センター作物機能開発部 中澤芳則)

〔さとうきび〕

1. 作付の概要

鹿児島県の2002/2003さとうきび年産の収穫面積の県合計は9,876ha、前年比105.3%で前年よりやや増加した。種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島は微増、喜界島、与論島は微減であった。作型では春植22.7%、夏植21.4%、株出55.9%であり、前年と同程度の構成比であった。品種の構成ではF177が減少し、Ni17の普及が進んでいる。沖縄県の収穫面積は県合計13,894ha、前年比103.7%であり、前年よりやや増加した。沖縄本島地域および八重山地域が増加し、宮古地域は同程度であった。作型では春植および株出しが増加し、夏植は同程度であった。構成比は春植12.5%、夏植45.3%、株出42.2%であった。品種の構成ではNCo310、F177が減少し、Ni9、NiTn10、Ni11の普及が進んでいる。分蜜糖の製造は種子島で始まり(2002.12.10)、石垣島で終了した(2003.05.10)。

2. 作柄の概況

鹿児島県では台風や長期干ばつの被害で、10a当たり収量は、県平均は5,227kg、前年比76.8%と大幅に減少した。10a当たり収量の減少にともない生産量も大幅に減少し、県合計は前年比80.9%、516,264tであった。甘蔗糖度の県平均は13.91%であり、前年と同程度で、14.4%以上の原料は全体の38.1%を占め、前年よりやや増加した。沖縄県では鹿児島県と同様に台風被害のため10a当たり収量の県平均は5,830kg、前年比90.9%に減少した。生産量は10a当たり収量の減少した沖縄本島地域で前年比84.8%、宮古地域で90.1%と減少したが、台風被害が軽微で10a当たり収量が増加した八重山地域は前年比139.9%と大幅に増加し、県合計は前年比94.3%、810,050tとなった。甘蔗糖度の県平均は14.2%で、前

年よりはやや低いものの優良であった。14.5%以上の原料は43.0%と前年よりやや減少した。

2002/2003年期の沖縄、鹿児島両県のさとうきび生産実績

県別	年次	農家	収穫	10a	収穫量	産糖量*	分蜜糖歩留り
		戸数	面積	当たり			
		(戸)	(ha)	(kg)	(t)	(t)	(%)
鹿児島	02/03	10,888	9,876	5,227	516,264	61,997	12.01
	01/02	10,855	9,376	6,808	638,293	76,681	12.02
	前年比(%)	100.3	105.3	76.8	80.9	80.9	99.9
沖縄	02/03	18,741	13,894	5,830	810,050	97,847	12.08
	01/02	18,906	13,393	6,415	859,137	108,457	12.62
	前年比(%)	99.1	103.7	90.9	94.3	94.3	95.7
両県計	02/03	29,629	23,770	5,529	1,326,314	159,844	12.05
	01/02	29,761	22,769	6,612	1,497,430	185,138	12.32
	前年比(%)	99.6	104.4	83.6	88.6	86.3	97.8

注) * : 含蜜糖を含む生産量。

さとうきびおよび甘ん糖生産実績 (鹿児島県、沖縄県) より編集。

(九州沖縄農業研究センター作物機能開発部 氏原邦博)

〔野 菜〕

1. イチゴ

14年産は、各県とも概ね順調な生育であり、平年並の出荷量であったが、単価はやや回復した。鹿児島県では9月の高温傾向で花芽分化・定植が3～5日遅れ、頂果房肥大・着色は、低温で着色遅れたが肥大良好であった。福岡県ではうどんこ病、ヨトウムシ等の病虫害はやや少なかった。15年度産は、長崎県、鹿児島県等で夏期の高温により花芽分化がやや遅れ、定植後の活着、生育も高温干ばつ等によりやや遅れた。福岡県、鹿児島県では炭そ病、佐賀県では立ち枯れ性病害の多発や炭そ病の続発がみられた。佐賀県では「さがほのか」、福岡県では「あまおう」への品種転換が急加速した。長崎では「さちのか」がかなり増加した。他県では引き続き「とよのか」が主力品種となっている。高設栽培は長崎での5ha増が目立ち、37haとなった。

2. キュウリ

露地きゅうりでは、宮崎県で、べと病、褐斑病等の病害の他、ウリノメイガ、ハスモンヨトウ等の虫害の発生も見られた。夏秋きゅうりでは、大分県で夏期の曇雨により草勢が弱く推移し、うどんこ病、褐斑病、べと病等が多発し、8月までの枯れ上がりが多かった。

ハウス抑制きゅうりでは、佐賀県で、「オーシャン」, 「オーシャンII」, 「ハイグリーン22」が主要品種となっている。9月の高温乾燥の影響が一部出たが、概ね順調に生育し、年内出荷量は104%となった。宮崎県では11月の温度が高く収穫終了が早まった。

促成きゅうりでは、宮崎県でうどんこ病、菌核病、褐斑病の発生がみられた。また、つる下げ栽培でも同様の病害が発生し、一部に心止まり症状も発生した。つる下げ栽培では、11月の高夜温のため徒長気味の生育となり、果形が悪くなり平箱での出荷が遅れた。

半促成きゅうりでは、佐賀県で、「ハイグリーン21」, 「ハイグリーン22」, 「グリーンラックス」が主要品種として定着している。

3. スイカ

大分県の無加温ハウス栽培で、1～3月の低温寡日照により7～10日の生育遅れが生じ、さらに強風害による品質低下が発生した。

4. ニガウリ

長崎県ではイチゴ後作導入のニガウリが順調で3億9千万円の販売実績となった。島原地域が中心であるが、県内各地で作付け拡大の動向がある。品種は「えらぶ」(51%)、久留米種苗園芸「百成り2号」(49%)である。

5. トマト

促成トマトは、佐賀県では「サンロード」, 「ハウス桃太郎」, 「S136」が多い。初秋の乾燥により一部に青枯れ病、黄化葉巻病、ハモグリバエ、生育遅れがみられたが、増収した。長崎県ではトマト黄化葉巻ウイルスが大村地区、佐世保、琴海町、国見町、森山町で発生し、防除対策の徹底により小康状態であったが、本年、島原半島を中心に多発した。「ハウス桃太郎」を主に「麗容」「桃太郎J」などで作付けは43.9haである。

夏秋トマトは、大分県で台風、日照不足による生育遅延、草勢低下、着色遅れ等が発生した。

ミニトマトは、佐賀県では「ココ」に「がんばる」, 「新メイト」台木が多く、年内の出荷量が増加した。長崎県では「千果」「サンチェリー250」が中心で18.5haと微増した。

6. ナス

促成ナスは、福岡県では、年末以降の天候不順により、草勢低下、側枝未充実、流蕾、等の状態となり、さらに灰色かび病、すすかび病等が蔓延し早期の出荷終了、品質低下が生じ大幅な減収となった。15年度は遅植えが普及し、活着、収量とも好調である。佐賀県では、「筑陽」に「台太郎」・「トナシム」・「トレロ」台で垣根仕立てが増加した。遅植えが増え、増収傾向である。

7. ピーマン

14年産促成ピーマンは、宮崎県では、ウイルス病が発生し、1月から「京鈴」で鉄欠乏症状が見られ、気象条件によるものか葉面散布の効果かは不明であったが、3月頃に回復した。鹿児島県では、1～3月の極端な低温(降雪日もあり)の影響で草勢低下がみられ、低収となった。4～5月は気温が平年より高く推移し一時的に増収となったが、草勢が低下した株に病害の発生を助長し出荷量は少なかった。

15年産促成ピーマンは、宮崎県では、昨年のウイルスの発生を受けて防除を徹底したため発生しなかった。うどんこ病、アザミウマ類の発生は見られたが、中部、児湯地域でコナジラミ類の発生が認められた。鹿児島県では、「T-143」, 「京鈴」, 「京ゆたか」などで約70haの栽培面積がある。定植期は早進化栽培が9月上旬から、普通栽培で9月下旬～10月上旬であった。いずれの作型も、天候に恵まれ、活着も良く、その後の生育も良好であり、出荷は9月下旬から始まり11月～12月の天候に恵まれ順調な生育で出荷量も多い。

夏秋ピーマンは夏期の曇雨天により落花が多く、1～2割減収した。7月に黄化えそ病、9月以降うどんこ病が多発した。

8. ソラマメ

15年産は鹿児島県では、1～3月の日照不足・低温により、曲がり莢が多く、収穫量が低下した。4月には平年並みに回復したものの、5月の気温の上昇や降雨により、品質は低下した。

16年産は、鹿児島県南部では、11月に気温が高く年内どりにしみ症が発生した。また、県北では1～2月の寒波で、芯止まりが発生し、減収が予想される。長崎県では、32.6haで、五島（18.4ha）、島原地域（5.0ha）等で産地化が図られており、離島や高齢者を中心に栽培が拡大中である。

9. 実エンドウ

15年産は、鹿児島県では、1～3月の日照不足・低温により、実入りが悪く収穫量が低下した。4月には平年並みに回復したものの5月の気温の上昇や降雨によりズルケが発生する等品質は低下した。

16年産は、鹿児島県では、高齢化により減少傾向にある。県北の一部で1～2月の寒波で芯止まりが発生し、減収が予想される。

10. サヤインゲン

長崎県では、系統面積55.6ha（対前年96.7%）と微減傾向である。播種時の乾燥により生育がバラつき秋の強風等により莖葉、若莢が風ずれする等の影響を受けた。ハウス抑制等の導入の動きがある。

11. アスパラガス

佐賀県では、春芽は順調であったが、台風や梅雨の影響により7月、10月が低収であった。立茎時期のずらしにより4～5月の収量が毎年増加してきている。斑点病発生と高温による黄化遅延により16年産への悪影響が危惧される。長崎県では、春の萌芽は概ね順調であったが、夏場の日照不足等により7月前後の生産が不安定となり年間平均単収は1,765kgと前年比88%で終了した。また、夏場の単価低下対策として、春どりの作型延長も一部検討されている。夏は高温により品質低下が目立ったものの、例年のような異常莖の発生は少なかった。133.5ha（前年比105%）、出荷量2,337t（同94.4%）、平均単価944円/kg（同101.2%）と3年連続で1,000円/kgを下回った。

12. タマネギ

15年産は、長崎県では、系統取り扱い実績は、早生（3～5月）：面積150ha、出荷量6,887t（前年比99%）、販売単価115円/kg、普通（6月以降）：面積64ha、出荷量1,586t（前年比70%）、販売単価83円/kgであった。諫早、江迎、平戸等で機械化定植等省力化技術の普及が進んでいる。

16年産は、佐賀県では、9～10月の高温乾燥による苗の生育不良が生じ、定植は順調であったが、極早生に分球やブカ玉の異常がみられた。12月下旬から1月下旬にかけての低温により莖葉の寒害が多発したが、以降の好環境により病虫害の発生も少ない。

13. ニンジン

長崎県では、春にんじん（4～7月出荷）は、系統面積103ha（前年比105%）、出荷量1,527t、79円/kgの実績であった。冬にんじんは、かん漑施設を活用し島原、飯盛を中心に産地化が図られているが、7月以降の高温

干ばつ等により作型が冬場にずれ込んだ。コート種子、テープシーダー播種による省力化技術の普及・定着が進んでいる。7月まきの早い作型において「寸づまり症（仮称）」と呼ばれる短根のニンジンが発生し、原因と対策が求められている。また、「豚鼻症（仮称）」と呼ばれる生理障害も発生している。

14. 深ネギ

大分県では、4月定植の中山間地の夏秋栽培では台風後の軟腐病多発による収穫皆無がみられた。海岸線の西高地域では軟腐病が発生したが軽微であった。鹿児島県では、水田地帯で夏場の軟腐病が多発した。栽培面積は減少傾向にある。冬どりは減少が大きい反面、春どりは微増傾向にある。

15. コネギ

福岡県では、7～9月の前半低温、日照不足、9月高温、多日照、台風等の影響により、葉先枯れ、発芽不良、ハモグリバエ・スリップス加害が生じ7～10月はかなり低収となった。大分県では、台風による直接の被害はなかったが曇雨天の影響で軟弱徒長気味の生育に推移し、葉先枯れや葉色の薄いものが目立った。

16. ジャガイモ

長崎県では、春作の面積（系統扱い）は、1,637haで昨年比90.1%である。同出荷量は、37,689t（前年比90.4%）、販売単価は142円/kg（対前年比158%）であった。丸物：マークインの割合は73：27と昨年並みである。鹿児島県では、15年10月～12月の作付け面積は前年比98%であり、熊毛が10月上旬から、大島地区は10月中旬からの作付けであった。植付け時の高温、乾燥で萌芽不良が多かったが、その後の生育は天候に恵まれ順調である。

（九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 岩永喜裕）

〔果 樹〕

1. 常緑果樹

1) 温州ミカン

発芽は平年より3日程度早く、開花も3～5日程度早かった。着花量は、極早生温州、早生温州、普通温州ともに平年並みからやや多であった。生産量は、極早生温州、早生温州は平年並み程度、普通温州はやや少であり、前年対比は、極早生温州80～90%、早生温州80～100%、普通温州は80～90%であった。

果実肥大期は、8月下旬頃まで降水量が多く日照が不足した。果実肥大は、極早生温州、早生温州および普通温州は平年並みであった。成熟期は、極早生温州は平年並み、早生温州および普通温州は2日程度遅かった。

成熟期の気象は、9月から10月まで高温乾燥が続き、降水量は平年より少なく、日射量は平年より多かった。糖度は極早生温州、早生温州は平年並み、普通温州は0.2度程度低かった。減酸は、極早生温州、早生温州、普通温州ともに早く、特に極早生温州と早生温州で早かった。着色は、極早生温州、早生温州、普通温州ともに並みかやや遅い県が多かったが、食味は、極早生温州、

早生温州，普通温州ともに平年並みかやや不良であり，外観はいずれもやや不良から不良とする県が多かった。生理障害については，特に極早生温州で日焼け果が多く，極早生温州，早生温州および普通温州とも浮皮が多く発生した。

病害虫に関しては，かいよう病，黒点病の発生がやや多く，そうか病も発生した。果実腐敗病が極早生温州でやや多かった。カメムシの被害は少なかったが，ミカンハダニの発生が10月以降にやや多かった。

2) 中晩生カンキツ

いずれの中晩生カンキツにおいても，発芽日は平年並み，開花日は5日程度早かった。着花は平年並みであり，収量は甘夏，ポンカンおよび不知火ともに平年並みであった。果実肥大は甘夏，不知火，ポンカンともに良であった。糖度は甘夏，ポンカン，不知火とも平年並みであった。減酸は各品種とも平年並みかやや遅かった。そのため，食味は甘夏はやや不良，ポンカンは良，不知火はやや不良であった。着色は各品種とも早いとする県が多かったが，外観はやや不良であった。病害虫の発生状況は，ウンシユウミカンとほぼ同様であった。

3) その他

ビワでは，発芽日が5日程度遅く，開花日は10日遅かった。しかし，成熟期は平年並みであった。収量は前年対比86～90%でやや不作であった。糖度，食味とも平年並みであった。病害虫は，長崎県でがんしゅ病，果実腐敗が多発した以外は目立った被害はなかった。

2. 落葉果樹

1) ナシ

発芽日，開花日は2～4日早かった。そのため，成熟期も3～5日早かった。着花は平年並みかやや多であったが，果実肥大はやや不良であった。果実収量はやや不作であった。糖度は平年並みか不良であり，食味は平年並みかやや不良であった。これは，果実肥大期が低温で降水量が多く，日照が少なかったためである。着色は平年並みであったが，外観はやや不良であった。生理障害は6～7月の降雨により裂果が多かった。病害虫に関しては，一部で黒星病，ハダニの発生がみられた以外は特に目立った被害はなかった。

2) ブドウ

発芽日，開花期は3～5日早かったが，成熟期は遅かった。果実肥大は平年並みから良であったが，果実収量は不良であった。糖度は果実肥大期の日照不足により低かったが，減酸は平年並みであり，食味は平年並みかやや不良であった。着色は遅く，一部で着色不良果が発生し，外観はやや不良であった。病害虫に関しては，べと病が多発し，晩腐病の発生も認められた。

3) その他

カキは，発芽日，開花日ともに3～5日程度早く，成熟期は3日程度遅かった。着花は平年並みから多であり，果実肥大は平年並みから良であったため，収量はやや豊作であった。糖度，食味とも平年並みであった。着色が遅く，外観は平年並みであった。生理障害として樹上軟熟果が発生した。病害虫では，一部に炭疽病の被害がみられた。

モモは，発芽日，開花日とも平年並みか早く，成熟期

も平年並みであった。糖度は日照不足により低く，食味は不良であった。果実肥大は平年並みか良であり，果実収量はやや不作であった。着色および外観は平年並みかやや不良であった。病害虫は，せん孔細菌病が多発したが，その他は平年並みであった。

クリは，発芽日，開花日とも4～5日早く，成熟期も5日程度早かった。着花は多であったが，収量はやや不作であった。病害虫等の発生は平年並みであった。

3. 熱帯果樹

1) パインアップル

出蕾期が平年に比べ12日遅かったため，成熟期も7日遅れた。果実肥大は良であったが，生産量はやや不作であった。糖度は高かったが収穫期の減酸は遅く，食味はやや不良であった。着色は平年並みであり，外観も平年並みであった。その他，生育に目立った変化は無かった。

2) マンゴー

発芽日，開花日とも平年並みであり，果実成熟期も平年並みであった。着花量，果実肥大とも平年並みであり，生産量も平年並みであった。糖度は平年並みであり，減酸，収穫期の酸濃度も平年並みであったため，食味も平年並みであった。着色および外観は平年並みであった。

3) パパイア

発芽日，開花日とも平年並みであり，果実成熟期も平年並みであった。着花量は平年並みであり，果実肥大も平年並みであった。糖度は平年並みであり，減酸，食味および着色等の果実品質も平年並みであった。生理傷害として奇形果，日焼け果が発生した。病害虫に関しては，立ち枯れ症が発生し，夏期にハダニの発生が多かった。

（果樹研究所カンキツ研究部（口之津）小野祐幸）

〔茶〕

1. 一番茶

1月上旬に大幅な気温低下が認められたが，茶樹の耐寒性が強い時期のため被害は全くなかった。3月中旬は平年よりも気温が低く経過し，萌芽期の遅れが心配されたが，その後の気温の回復により萌芽期は平年よりもやや早くなった所が多かった。萌芽後の4月上旬にやや低温が続き新芽の生長が一時的に緩慢になったが，その後は気温が平年よりも高めに推移したため一番茶の摘採期は平年並みかやや早くなった。九州では本年度は晩霜害の被害は特に認められなかった。

一番茶の生葉収量は摘採時の出開度と大きく関係する。本年度の生葉収量が平年よりも少なかった所を解析した結果，出開度の低い若芽摘みを行った所が多いことがわかった。このため，出開度を考慮して調整すると本年度の生葉収量はほぼ平年並みと推察された。

病害虫の発生では，九州南部で一部赤焼病が多発したが，その他では特記すべき病害虫は認められなかった。

2. 二番茶

5～6月の平均気温は平年よりもやや高めに推移し，降水量も平年並みであった。このため二番茶芽は順調に生育し，摘採期は昨年よりもやや早く，平年と比べると

5～10日早まった。

生葉収量は若芽摘みが行われたため平年よりも少なかった。収量構成要素では、摘採面当たりの芽数よりも百芽重の低下が大きかった。

病害虫の発生では、チャノホソガ、チャノコカクモンハマキ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイが発生したが大きな被害はなかった。また、炭疽病が一番茶残葉を中心に発生した。

3. 三番茶

6月中旬～下旬は平年に比べて降水量が多く日照時間が少なかった。このような気象条件と若芽摘みなどにより摘採面当たりの芽数および百芽重はやや少なくなった。このため生葉収量は平年に比べてやや低い所が多かった。

病害虫の発生では、チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャハマキが散見されたが特に大きな被害は認められなかった。

本年度の茶の品質は一番茶から三番茶を通して良好であった。価格的にも一番茶から三番茶を通して堅調に推移し、昨年みられたような二番茶、三番茶の大幅な価格低下はなかった。

九州における主要産地の‘やぶきた’の作況試験園における摘採期および10a当たりの生葉収量を第1表に示す。

（野菜茶業研究所枕崎茶業研究拠点 武田善行）

第1表 主要茶産地の作況試験園における摘採期および10a当たりの生葉収量

産地名	年度	一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 (月.日)	収量 (kg)	摘採期 (月.日)	収量 (kg)	摘採期 (月.日)	収量 (kg)
大 隅 (鹿児島県)	本年	4.21	629	5.30	595	7.9	434
	前年	4.22	668	6.3	408	7.10	269
	平年	4.26	644	6.10	399	7.14	317
知 覧 (鹿児島県)	本年	4.22	649	6.2	388	7.10	324
	前年	4.24	541	6.6	546	7.15	390
	平年	4.27	597	6.12	517	7.19	372
川 南 (宮崎県)	本年	4.25	653	6.9	508	7.16	385
	前年	4.22	569	6.3	711	7.4	346
	平年	4.27	743	6.8	781	7.12	477
八 女 (福岡県)	本年	4.29	578	6.13	475	—	—
	前年	4.25	624	6.12	367	—	—
	平年	5.2	607	6.17	436	—	—
東 彼 杵 (長崎県)	本年	4.29	516	6.13	321	更新処理	—
	前年	4.30	743	6.14	362	7.23	261
	平年	5.1	622	6.18	388	7.25	296
嬉 野 (佐賀県)	本年	4.27	454	6.11	621	—	—
	前年	4.27	538	6.12	623	—	—
	平年	5.3	632	6.17	609	—	—

〔畜 産〕

2003年2月1日現在の九州・沖縄地域における家畜別飼養頭数および飼養戸数は表に示すとおりである。

1. 乳用牛

九州・沖縄地域の乳用牛の飼養頭数は162千頭で、前年度並みであった。九州は155千頭とやや増加、沖縄県で340頭減少した。全国では171.9万頭と前年並みの頭数規模で推移した。飼養戸数の減少は、全国的にみられる

が、大規模の飼養者層における飼養拡大によって頭数は昨年並みに確保された。九州では50頭以上の大規模傾向となっている。九州・沖縄地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県（51.6千頭；九州の34%）、福岡県（24.0千頭；同14%）、宮崎県（21.9千頭；同12%）である。九州・沖縄における乳用牛飼養農家戸数は3,360戸で、前年より60戸減少した。飼養農家1戸当たりの飼養頭数は48.3頭で、前年より1.8頭増加した。九州各県の1戸当たり飼養頭数は48.1頭、沖縄県で53.8頭と全国平均頭数57.7頭より少ないが、北海道の93.9頭を除けば東海地域（55.9頭）に次ぐ頭数規模となっている。

2. 肉用牛

九州・沖縄における肉用牛の飼養頭数は、1,088千頭で前年に比べて1千頭（-0.1%）減となった。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県（348千頭）、宮崎県（267千頭）、熊本県（142千頭）であり、この3県で九州・沖縄全体の69.6%を占めている。九州・沖縄は肉用牛のうちで乳用種の占める割合が最も低い地域であるが、その割合は17.8%（19.5千頭）で、前年よりやや減少した。福岡県は例外で、県内の肉用牛の15.6千頭が乳用種で、50.5%を占めている。

用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く53.5%（583千頭）と前年とほぼ同様である。肉用種子とり用雌牛飼養頭数の全国に対する九州・沖縄の割合は56.3%であった。県別では鹿児島県123千頭、宮崎県99千頭、沖縄県48千頭となっている。一方、九州・沖縄の肉用種肥育牛は、333千頭で全国比では45.4%を占める。九州・沖縄地域の肉用牛飼養農家戸数は46,640戸であり、前年より2,230戸減少し（-4.0%）、全国ベースの-5.9%と同様に減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し23.3頭で、前年より1.0頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は28.6頭である。九州・沖縄地域の飼養規模は全国よりも小さいのはこの地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによるものである。

各畜種とも飼養戸数および飼養者は、飼養者の高齢化と後継者不足等により小規模飼養者を中心に飼養中止が続いている。

3. 豚

2003年2月1日現在の九州・沖縄における飼養頭数は322.1万頭で、ほぼ前年度並みであった。飼養頭数の多い上位3県は鹿児島県（131.9万頭）、宮崎県（84.9万頭）、沖縄県（29.0万頭）であり、九州・沖縄の飼養頭数の76.3%を占めている。

飼養農家戸数は、全国で9,430戸、九州・沖縄では3,040戸であり、中小規模が減少したのに対し、大規模農家は増加している。九州での1戸当たり飼養頭数は1,114.4頭（前年比5.6%）でかなり増加した。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県（1,293頭）、大分県（1,212頭）、宮崎県（1,133頭）である。飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および都市部を中心にふん尿処理等による環境問題での飼養中止等による。

4. 採卵鶏

成鶏飼養羽数（種鶏を除く）は2,374万羽で前年に比べて43万羽の減少（-1.8%）を示した。飼養羽数の多

家畜飼養頭羽数および飼養農家戸数（2003年2月1日現在）

		乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭羽数	全 国	171.9万 (-0.4%)	280.4万 (-1.2%)	972.5万 (1.2%)	13,727万 (-0.3%)	10,373万 (-1.8%)
	九 州	154,900 (0.4%)	1,007,000 (-0.2%)	2,931,000 (0.3%)	2,244万 (-2.0%)	4,620万 (-2.3%)
	沖 縄	7,530 (-4.3%)	81,000 (0.7%)	289,700 (-0.8%)	129万 (3.1%)	64万 (9.2%)
	九州十沖縄	162,430 (0.7%)	1,088,000 (-0.1%)	3,220,700 (1.7%)	2,374万 (-1.8%)	4,684万 (-2.2%)
農家戸数	全 国	29,800 (-3.9%)	98,100 (-5.9%)	9,430 (-5.7%)	4,340 (-4.2%)	2,839 (-2.1%)
	九 州	3,220 (-3.6%)	43,200 (-4.8%)	2,630 (-5.1%)	820 (-4.7%)	1,084 (-3.5%)
	沖 縄	140 (-6.7%)	3,440 (-0.9%)	410 (-14.6%)	90 (-10.0%)	18 (5.9%)
	九州十沖縄	3,360 (-4.0%)	46,640 (-4.6%)	3,040 (-7.9%)	910 (-5.2%)	1,102 (-3.3%)
一戸当たり頭数	全 国	57.7 (2.0頭)	28.6 (1.4頭)	1,031.3 (70.1頭)	31,629 (1,182羽)	36,538 (104羽)
	九 州	48.1 (2.0)	23.3 (1.1)	1,114.4 (58.8)	27,366 (725)	42,620 (520)
	沖 縄	53.8 (1.3)	23.5 (0.3)	706.6 (98.5)	18,222 (3,660)	35,556 (850)
	九州十沖縄	48.3 (1.8)	23.3 (1.0)	1,059.4 (70.2)	26,462 (910)	42,505 (514)

注) a) ()内は対前年に対する増減(%, もしくは頭羽数)。
 b) 採卵鶏の飼養戸数は、種鶏のみの飼養者を除き、1000羽以上の飼養戸数。羽数は、種鶏を除く成鶏。
 c) 資料は農林水産統計情報（平成15年4月30日、6月10日、6月18日・農林水産省統計情報部、沖縄総合事務局公表）による。

い県は、鹿児島県（826万羽）、福岡県（411万羽）、宮崎県（345万羽）で、これらの3県で、九州・沖縄の全飼養羽数の66.6%を占めた。九州・沖縄での飼養戸数は910戸、そのうち、成鶏雌1000羽以上を飼養するのは850戸である。1戸当たりの成雌飼養羽数は26,462羽と、前年に比べて3.6%増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県（31,355羽）鹿児島県（30,585羽）と宮崎県がトップとなっている。飼養戸数の減少は、1万羽未満の小規模飼養者階層での減少による。

5. ブロイラー

九州・沖縄地域のブロイラーの飼養羽数は4,684万羽でそのうち、九州の飼養羽数は4,620万羽で前年に比べて2.3%減少したが、沖縄県では64万羽で9.2%増と前年に続く伸びを示した。全国の飼養羽数に対する九州・沖縄の飼養羽数割合は45.2%と非常に高い。飼養戸数は1,102戸で、前年に比べ38戸減少した。1戸当たりの飼養羽数は九州全体で42,620羽、沖縄県35,550羽、九州では鹿児島県、宮崎県の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の74.1%を占めている。1戸当たりの飼養羽数の多い県も、鹿児島県（50,605羽）、宮崎県（42,687羽）である。

ブロイラーの全国の出荷羽数は5億8,605万羽で、そのうち九州・沖縄は2億6,820万羽で、前年比3.9%の増加を示した。これは、大規模階層での出荷羽数増があったためである。

（九州沖縄農業研究センター畜産飼料作研究部 假屋堯由）

〔飼料作物〕

1. 作付面積

2003年の九州沖縄地域における飼料作物の作付面積は、牧草類（イネ科・マメ科の永年生、1年生を含む）が70,200ha、青刈りトウモロコシが19,009ha、ソルゴーが13,890ha、青刈りえん麦が5,476haであった。飼料作物合計は113,780haであった。作物別では前年と比較して、牧草類が760ha（1.1%）減、青刈りトウモロコシが384ha（2.0%）減、ソルゴーが972ha（6.5%）減、青刈りえん麦が545ha（11.1%）増であった。

2. 作況

牧草：6月中旬以降の低温・日照不足等の影響により生育が抑制されたが、10a当たりの収量は前年比99であった。

青刈りトウモロコシ：台風が6月から9月にかけて九州の西側と東側を通過したが、トウモロコシに実質的な被害をもたらすことはなかった。しかし、6月中旬以降の低温・日照不足によって春播きのトウモロコシの生育が抑制され、9月以降の高温・多照による水分不足によって二期作目のトウモロコシの生育が抑制され、10a当たり収量は前年比92であった。

ソルゴー：6月中旬以降の低温・日照不足と9月以降の高温・多照による水分不足によって生育が抑制され、10a当たり収量は前年比94であった。

青刈りえん麦：9月以降の高温・多照によって極早生えん麦の出穂が促進されたため、10a当たり収量は前年比92であった。

（九州沖縄農業研究センター畜産飼料作研究部 松岡秀道）

2003年度産の主要飼料作物の作付面積と収穫量

県名	飼料作物計 (ha)	牧草		青刈りトウモロコシ		ソルゴー		青刈りえん麦	
		面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)
福岡	2,730	1,840	93,300	135	5,410	406	26,900	30	...
佐賀	1,850	1,200	72,400	68	2,690	425	22,700	130	...
長崎	8,920	4,960	275,800	894	41,700	2,250	133,900	591	26,900
熊本	22,200	13,400	539,200	5,360	246,600	1,540	98,400	216	7,930
大分	8,510	5,760	288,400	1,260	70,300	1,120	77,100	109	...
宮崎	32,100	17,100	1,056,000	7,510	398,000	4,750	311,100	1,190	32,400
鹿児島	31,900	20,400	1,420,000	3,780	213,900	3,390	243,100	3,210	126,200
沖縄	5,570	5,540	635,100	2	129	9	908
計	113,780	70,200	4,380,200	19,009	978,729	13,890	914,108	5,476	193,430

注) 農林水産省大臣官房統計部、平成15年12月18日公表。